

評論 (Review)

保育者養成課程における「保育内容総論」

——テキスト本の分析から——

**Comprehensive Theory on the Contents of Childcare and
Early Childhood Education in Childcarer and Teachers for
Early Childhood Education Training Course: from the
analysis of text books**

伊藤 博美*
ITO, Hiromi*

要 旨

本稿では、1994年から2017年に刊行された、「保育内容総論」を題名に含む8冊を検討した。この検討結果から、2017年度内に案が示される予定の、新たな保育士養成課程における「保育内容総論」においては、いわゆる不易と流行、基礎（知識や理論）と応用（例えば問題解決能力）といった二面性が強く打ち出される授業内容が求められることになるかと予測される。

キーワード：保育内容総論，保育士養成課程，保育所保育指針

Key words：Comprehensive theory on the contents of childcare and early childhood education, Childcarer training course, Nursery child care guidelines

はじめに

2017（平成29）年3月に保育所保育指針が改定され、現在（平成29年12月）、保育士養成課程の見直しが検討されている。同年10月に開催された第8回保育士養成課程等検討会においては論点が5つ示された。そのうち論点2において「改訂後の保育所保育指針において、幼児教育を行う施設として共有すべき事項として、新たに「育みたい資質、能力」や「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」などが示されたこと等を踏まえた、保育の内容に関する教科目（「保育内容総論」「保育内容演習」等）の内容充実、「保育の計画と評価」に関する教科目の検討」が提示され、平成29年度内に新たな保育士養成課程案が示される予定である。

論点2に教科目名としてあげられる「保育内容総論」は、2010（平成22）年に開催された第5回保育士養成課程等検討会の参考資料に次のように書かれている。「「保育内容総論」（演習1）「保育内容演習」（演習5）（←「保育内容」6単位）¹⁾◇「保育内容」を分割し、総論と演習の違いを明確にするとともに、総論を理解した上での演習履修となるようにする」²⁾。つまり保育内容総論は、5領域の内容に関する教科目より先に履修することが期待された、指定保育士養成施設における保育の内容・方法に

関する必修の教科目として設定されている。

その教授内容については、厚生労働省雇用均等・児童家庭局長名で出された「指定保育士養成施設の指定及び運営の基準について」の中で、次のように一例が示されている。

〈目標〉

1. 保育所保育指針における「保育の目標」、「子どもの発達」、「保育の内容」を関連付けて保育内容を理解するとともに、保育指針の各章のつながりを読み取り、保育の全体的な構造を理解する。
2. 保育内容の歴史の変遷について学び、保育内容について理解する。
3. 子どもや子ども集団の発達の特性や発達過程を踏まえ、観察や記録の観点を習得し、保育内容と子ども理解とのかかわりについて学ぶ。
4. 子どもの生活全体を通して、養護（生命の保持、情緒の安定）と教育（健康・人間関係・環境・言葉・表現）が一体的に展開することを具体的な保育実践につなげて理解する。
5. 保育の多様な展開について具体的に学ぶ。

〈内容〉

1. 保育の基本と保育内容 (1)保育所保育指針に基づく保育の基本及び保育内容の理解 (2)保育の全体構造と保育内容
2. 保育内容の歴史の変遷
3. 保育内容と子ども理解 (1)子どもの発達の特性と保育内容 (2)個と集団の発達と保育内容 (3)保育における観察 (4)保育における記録
4. 保育の基本を踏まえた保育内容の展開 (1)養護と教育が一体的に展開する保育 (2)環境を通して行う保育 (3)遊びによる総合的な保育 (4)生活や発達の連続性に考慮した保育 (5)家庭、地域、小学校との連携を踏まえた保育
5. 保育の多様な展開 (1)乳児保育 (2)長時間の保育 (3)特別な支援を必要とする子どもの保育 (4)多文化共生の保育³⁾

こうして2010年の保育士養成課程改正を受け、翌2011年度より「保育内容総論」は新設され、指定養成施設において授業が実施され、研究されている⁴⁾。しかし、そこで用いられているテキスト（教科書）に関しては、川俣ら（2015）以外に管見の限り見当たらない。川俣ら（2015）は8養成施設を対象に「保育内容総論」の運営について調査し、授業での使用テキストについて、「保育内容総論」と銘打ったテキストの多さと内容が多様であることを踏まえた上で、そうしたテキストや保育所保育指針・幼稚園教育要領の解説書の授業での使用状況について報告している⁵⁾。また、渡辺一弘（2016）は、川俣ら（2015）を踏まえ、歴史や現代的課題を盛り込んだ包括的なテキストと、現場に即した保育内容を深く扱うテキストの二つにまとめている⁶⁾。

冒頭で述べた第8回保育士養成等検討会では、この現行の保育内容総論および保育内容演習に対して、「保育の目標や各領域（5領域）のねらい及び内容などの全体構造を理解した上で、子どもの発達過程を見通した保育内容を計画し、実態に即して展開する保育の実践力を強化することを念頭に置き、内容を整理充実する」⁷⁾とされている。

そこで本稿では、2010（平成22）年以前の保育士養成課程において用いられたと推測される「保育内容総論」のテキスト、およびそれ以降のものを、上述2010年に示された教授内容の〈内容〉（以下「2010教授内容一例」とする）を観点として比較検討する。これにより、「保育の目標や各領域（5領域）のねらい及び内容などの全体構造を理解した上で、子どもの発達過程を見通した保育内容を計画」することを目標とした、新たな保育士養成課程における「保育内容総論」の教授内容を予測する足がかりとしたい。

具体的には、1994年から2010年をはさんで2017年に刊行された、「保育内容総論」を題名に含む8冊を検討の対象とする⁸⁾。これらは、3～19名による共著（監修者、編者除く）であり、A5判146～246、B5判197（他に別冊28）～216という総ページ数、6～15章から成り、6社（うち2社が2冊）から刊行されたものである。

1. 各書の特徴

上記8冊について、刊行年月順に特徴をあげていく。

①1994年刊行書

8冊のうち最も章の数と総ページ数が少ない。また、キリスト教保育、仏教保育など、私立幼稚園・保育所を意識した内容も盛り込まれている。「2010教授内容一例」と比較すると、5の(3)(4)に関する記述が無い。また、「第6章 教育課程・保育計画、指導計画の作成と展開」では教育課程や保育計画から日案まで計画の作成の流れが説明されている。ただし記録については1,2ページと記述が少ない。こうした内容は、現在求められているニーズがまだ把握されていなかった時期に起因すると推察される。

②2003年刊行書

執筆者も多く章数も13と多めである。「保育における課題遊び」の章が設けられている。ただしこの場合の課題遊びは、保育者が課題を設定するという意味ではなく、「保育者の意図的な環境や投げかけが背景にあるそのような環境の中、子どもが生活や遊びの中から自ら課題を見つけ、発展させていく」ものと捉えられている。一時期、放任によって子どもの主体的な遊びを疎外しないようにと誤解されていたことを反省し、環境構成など保育者の役割が強調されたことを受けたものと推察される。加えて保育の「実践、評価、改善を積み重ねる」という、いわゆるPDCAサイクルの先駆けが見出しにある。

「2010教授内容一例」の内容はほぼ網羅されていると言えるが、5の(3)(4)に関する記述が無い。①と異なり、子どもの理解や評価のために観察や記録が重視されている。また、①と異なり、保育計画（教育課程）の編成と、指導計画の作成が別の章に分けられている。

③2005年刊行書

冒頭に、子育て支援や小学校との連携、保育総合施設構想など、2017年にも課題とされていることをとりあげた「現代社会における保育の課題」、最後に「幼稚園・保育所実習と指導計画」の章が配置され、実習に貢献しようとしている。また見出しに保育（者）の「専門性」という言葉が見られるのは8冊のなかで本書が初めてである。「2010教授内容一例」と比較すると、3(3)(4)や5(3)(4)について十分な記述があると言いがたい。

④2010年刊行書

8冊のなかで最初にB5判で刊行されたものである。3名と最も少ない執筆者数による著作である。4つのパートに分けられ、1つのパートは2～4章から成る。③と違い、現代の保育の変化を明治以降の流れに連続させている。エピソードも豊富に掲載されている。また、「保育の専門家」や「保育者の専門性」に加え、「保育者の協働」といった見出しが見られる。「2010教授内容一例」と比較すると、3と4が「実践」のパートで横断的に書かれている。また、5(3)(4)について1節が割かれている。これは8冊のうち本書が初めてである。少ない著者数ながら横断的に内容を網羅している。

⑤2011年刊行書

④に続いてB5判である。各章のはじめに何を学ぶかが記され、次ページには2コマ漫画がユーモラスに描かれている。第1章は「ワークで学ぶ 保育内容はじめの一步」とあり、各節初めにワーク（課題）が設定されている。また各章の終わりには、「さらに学びたい人のために」と参考文献が示され、加えて「演習問題」も複数提示されるなど、学習者の学びを支援している。第3章は「遊びや生活を通して学ぶということ」と題されており、保育における子どもの学びに着目している。また最後の第8章には遊びや文化財など保育現場ですぐに求められるものが紹介されている。他方でそれまでの著作に見られた、教育課程や保育計画の編成、指導計画の作成に特化した章や節が見当たらない。

「2010教授内容一例」と比較すると、2の歴史的変遷については、2008年改訂（定）の幼稚園教育要領・保育所保育指針に絞って示されており、①～④にあったような明治から現代までを網羅するものではない。また、4(4)や5(3)(4)に関しては章や節などに特化して書かれていない。

⑥2014a 刊行書

8冊中で最も少ない6章構成である。序章では「保育内容総論とは」と題し、短いながらも学生の視点から「総論」の意味を問い直し、「総論」での学びが実践につな

がる重要性を明示している。副題に「あなたならどうしますか？」とあるように、豊富な事例をもとに学習者が検討できるよう問いかけられ、別冊として「演習ワーク」も添付されている。

⑤に続いて、本書でも教育課程や保育計画の編成、指導計画の作成に特化した章や節は見当たらない。④と同じ出版社から刊行されているが、学習者の目線を重視し豊富な事例から検討できるようになっている。また、③、④に見られた保育者の専門性については1節が割かれ、事例8つを通して示されている。「2010教授内容一例」と比較すると、5について特化した章や節は見当たらない。

⑦2014b 刊行書

⑥の半月後に刊行されているが、⑥とは対照的に15名の著者によるもので、養成校での授業回数も意識されているのか、13章構成のものである。各章の冒頭は短いながら読者へ疑問を投げかけ、最後に演習課題も提示されている。最後の第13章は「保育内容の向上をめざして」と題され、「保育の質」「省察」など保育（者）の専門性に関連する言葉が見出しにみられる。加えて同章第2節では、本書が現職者も対象としているため（「はじめに」参照）、「保育研修のあり方」という節もあり、演習課題は園長の立場から検討させるなど現職者も対象とし、保育（者）の専門性を強く意識した章となっている。

「2010教授内容一例」と比較すると、保育者養成において、「最も使いやすいテキスト」⁹⁾となるよう意識して編まれたのか、ほぼすべてが網羅されている。また、⑤や⑥では見られなくなった計画と、観察・記録、さらに第三者や自己によるものも含め、評価とを関連づけた1章が設けられていることも特徴といえる。

⑧2017 刊行書

④から⑦の4冊がB5判で刊行されていたのに対し、「コンパクト版」と銘打って、A5判の、8冊中最も少ないページ数ながら、養成校での授業回数を強く意識した15章構成のものである。

第15章では、「2010教授内容一例」と比較すると⑦と同様、ほぼすべてが網羅されている。5や、③、⑤、⑦における見出しで明示された子育て支援に加え、「情報化社会への対応」といった、現代的課題も示されている。

2. 考察

以上のように発行年月順に、「2010教授内容一例」を手がかりとしながら、8冊を概観して比較したことを通して、次のことが言えよう。

第一に、内容については、幼稚園教育要領や保育所保育指針の改定（訂）やそれに基づく保育士養成課程の改正¹⁰⁾だけでなく、社会の保育に対するまなざしの変化が反映されているといえる。例えば③が、実習に寄与する内容を含めたことや、保育（者）の専門性という言葉が見出しに見られるようになったことは特徴的な動きであった。

また、「「保育の計画と評価」に関する教科目の検討」が上述の保育士養成課程等検討会で論じられていることから、保育内容総論では⑤や⑥のような教授内容となることが予測される。

第二に、1990年代から始まった教授から学習へのシフト¹¹⁾が、保育内容総論のテキストにも見られる。④で実践に特化したパートを設け、エピソードから学べるようにしたことは、8冊のなかで、その萌芽的な動きだと捉えられ、その後の⑦までその傾向は続いている。ただし⑧は、「保育内容総論」以外の授業において、学習や実践を重視した授業が展開されつつある保育士養成課程の変化を反映してか、1回の授業で終わられるよう、極めて「コンパクト」なボリュームで収められて¹²⁾おり、かつ学習者の視点から書かれているような課題の設定や発問は見られない。

第三に、保育内容総論の教授内容の一例が厚生労働省の局長名で出されたことによって、テキストの標準化が図られたと言えよう。⑤や⑥においては、「2010教授内容一例」に直接一致するような形で見出しが付けられていない一方で、⑦や⑧は、直接一致する形で見出しが付けられている。教員養成課程のコアカリキュラムが示されたことで、幼稚園教諭の養成課程の標準化が進むことが予測されるように、冒頭で述べた、2019年の保育所保育指針改定に基づく、保育士養成課程の見直しによって、「保育内容総論」の教授内容の一例が再び示されれば、そのテキストも直接一致する形で編まれることが予測される。それは、保育士養成課程の標準化により、保育士に求められる資質・能力の保障につながる一方で、子どもの多様さや社会変化に対応する保育士の資質・能力の幅をせばめるものとなることが危惧される。

おわりに

本稿「はじめに」で引用した「保育の目標や各領域（5領域）のねらい及び内容などの全体構造を理解した上で、子どもの発達過程を見通した保育内容」について学ぶ、総論的な位置づけが「保育内容総論」に依然として求められる一方で、⑧に見られたように、保育現場での実践的な学びの機会となる授業科目が重視され、教授的側面の強い大学での授業の内容がスリム化されることにより、保育内容総論は、いわゆる不易と流行、基礎（知識や理論）と応用（例えば問題解決能力）といった二面性が強く打ち出される授業内容が求められることになると予測される。新たな保育士養成課程は、子育て支援という名の下に強く求められるサービスの側面を重視するものでなく、保育そのものと同様に、計画・実践・評価・改善の循環のうちにあることを強く意識し、目の前の子どもと社会変化、そこから予測される将来に生きる人間の成長を支援する人材（保育士）を育成するという原点に立ち戻るものである。したがって、保育内容総論は保育士養成課程において、遊びのある授業内容であることが求められるよう。

■注

- 1) 2010(平成22)年以前に「保育内容総論」というタイトルのテキスト本は存在する。これは、1970(昭和45)年の厚生省告示により専門科目が六つの系列に分類整理された際に「保育内容」がそのうちの一つにあげられたことに起因するものと推察される。その後1989(平成元)年の幼稚園教育要領の改訂に伴い翌1990(平成2)年に保育所保育指針が改定され、保育内容は6領域から5領域へと改められた。1991(平成3)年厚生省告示第121号では「保育の内容・方法の理解に関する科目」が一つの系列として示されている。2001(平成13)年厚生労働省告示第198号には必修の教科目として「保育内容」(演習6単位)が見られる。保育士養成課程における「保育内容」という教科目名の変遷について整理したものは、後述の渡辺(2016)が2011年以前にも見られたと指摘するほか管見の限り見られず、紙幅の都合上本稿ではこれ以上追及しない。
- 2) 厚生労働省 URL: <http://www.mhlw.go.jp/shingi/2010/02/dl/s0226-5i.pdf> 2017年12月6日閲覧。
- 3) 全国保育士養成協議会 URL: http://www.hoyokyo.or.jp/nursing_hyk/reference/26-3s2-2.pdf 2017年12月6日閲覧。
- 4) 福元真由美・中野圭祐(2012)「大学4年間の総合的実習プログラムの開発;「保育内容総論」の授業開発に関する中間報告(プロジェクト研究)」『東京学芸大学附属学校研究紀要39』pp. 61-70は、大学での学習と園での体験・実習の往還モデルを期し、4年間の保育者養成課程「保育内容総論」におけるグループ実習を中心とした授業実践について報告している。源証香・小谷直路(2014)「「保育内容」研究のあり方に関する一考察—保育者養成校における担当教員の専門分野の実態調査から—」は、全国の指定保育士養成施設を対象に調査し、教科教育や保育実践に造詣の深い教員が「保育内容」の授業担当者となるケースが増加していることを報告している。また、徳本達夫(2015)「保育内容総論授業の現状と課題」『人間福祉研究(3)』pp. 83-92は、「総論」としての授業のあり方について検討し、民秋言他編著(2011)『保育内容総論(再版)』北大路書房をテキストとして活用し、「総合的な観点に結びつくように保育課程・指導計画を長期的な観点から検討する作業を中心とした」授業実践を行ったとしている(p. 86)。これらを含め「保育内容総論」の授業実践に関するものを含め、CiNiiでは24本が検索結果(2017年3月22日検索)に上がるが、「保育内容総論」の教授内容全体に言及するもののみここに取り上げた。
- 5) 川俣沙織・川俣美佐子・永瀬美香子・圓入智仁・増田隆・那須信樹(2015)「「保育内容総論」運営上の課題に関する研究」『中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要第47号』pp. 217-222。
- 6) 渡辺一弘(2016)「「保育内容総論」の指導法についての検討—大分県の保育者養成校の事例を中心に—」『幼児教育研究2』pp. 1-13。
- 7) 厚生労働省 URL: http://www.mhlw.go.jp/file/05-Shingikai-11901000-Koyoukintoujidoukateikyoku-Soumuka/shiryou1_6.pdf 2017年12月6日閲覧。
- 8) 例えば2010年以降出版された「保育内容総論」を題名に含む著作物は、Amazonで検索した結果、21冊(うち1冊は別の1冊の改訂版)あるが、本稿では変遷をたどるため2010年より前のものを3冊、2010年のものを1冊、2011年以降のものを4冊、また、できる限り異なる著者によるものを抽出した。それ以外に抽出の意図はない。
- 9) 同書「はじめに」に記載。
- 10) 保育所保育指針の改定により「保育課程」という言葉が現れたことで、保育士養成課程には「保育課程論」という授業科目が現れた。保育の計画や評価については、この授業で学ぶことになり、保育内容総論で扱う必要性は無くなったと推測される。
- 11) 佐藤学が提唱した「学び合い」や「学びの共同体」などが一例であろう。佐伯胖・佐藤学・藤田英典(編)(1996)『学び合う共同体』東京大学出版会、他参照。
- 12) 同書「監修のことば」を参照。

■検討対象の文献一覧

阿部和子・前原寛・久富陽子（2010）『新保育内容総論』萌文書林

井上孝之・奥山優佳・山崎敦子（編）（2014）『子どもと共に学びあう 演習・保育内容総論』みらい

入江礼子・榎沢良彦（編著）（2005）『保育内容総論』建帛社

大豆生田啓友・渡辺英則・柴崎正行・増田まゆみ（編）（2014）『第2版 保育内容総論』ミネルヴァ書房

太田悦生（編）（2003）『保育内容総論』みらい

西頭三雄児・久世妙子（編著）（1994）『保育内容総論』福村出版

酒井幸子・守巧（編著）（2014）『演習 保育内容総論 あなたならどうしますか？』萌文書林

谷田貝公明・石橋哲成（監修）大沢裕・高橋弥生（編集）（2017）『保育内容総論』一藝社